
Strange love

水白 ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Strange Love

【Nコード】

N9131T

【作者名】

水白 ちい

【あらすじ】

結衣は酒場で同性愛の性癖を持つ男、祥吾と出会う。

祥吾は男に振られたばかり、初対面にも関わらず、なれなれしく話しかけてくる。祥吾は結衣の隣で金もないのに酒を飲み、酔いつぶれてしまった。マスターに頼まれ仕方なく支払いを肩代わりする事になった結衣。次の日、酔いがさめた祥吾に話すと祥吾は職を持たず、しかも家も無いという。絶対に金を返すからその間部屋に置かしてくれるようにと頼んできた祥吾、仕方なく奇妙な二人の生活が始まった。

どことなく冷たい性格の結衣は自分の事を祥吾に語るうとはしない。だが明るく何事にも樂觀的な祥吾との生活で、結衣は自分が性同一性障害者だということを打ち明けた。体は女、心は男：両親や周りからの目を気にして結衣は今までずっと本当の自分の気持ちを抑えていたのだ。

身体は女でも心は男である結衣と男が好きな祥吾の一風代わったおかしな恋愛物語。

自分探し中？（前書き）

この物語はフィクションです。

タグに恋愛とありますが、少女漫画のようにとっぴり恋愛していません。またボーイズラブともありますが、設定というだけでどっぴりBLしておりません。

じゃあ何なんだよこれ！と興味を持っていたただけた方は無理せず読んでいただければ幸いです。

自分探し中？

「なんだよ… やっぱり遊びだったんじゃないか！」

「ちよつと待て、お前が勝手に…」

夜の繁華街で何やらもめている二人の男

涙を流しながら大声で叫んでいるのは小柄な美少年だ

「俺ばかり好きで祥吾さんは俺の事なんて何とも思ってたんじゃないか？」

辺りを気にしながら少年をなだめようとする男が少年の質問に口ごもる

「やっぱり…。バイバイ… 祥吾さん、俺は大好きだったよ」

会話の内容からして、どうやらその二人は男性同士でありながら、恋愛関係にあつたらしい。

別れを告げると少年は祥吾の前から走り去っていった

走り去る背中を見送った後、祥吾は深いため息を吐くと近くにあった酒場へと足を向ける

洒落た店内ではテーブルに酔いつぶれたサラリーマンやいちゃつくカップル…。カウンターには見るからに仕事が出来そうなスーツ姿の女性が一人静かに酒を飲んでいる

祥吾は女性の隣に腰かけた

「マスター、なんでもいいから強いのちよーだい」

「はいよ」

椅子はいくらでも空いているのに・と不審に思ったのかちらりと視線を向ける女性

「一人？」

視線を向けられるのを待っていたかのように、にっこりと笑顔を向けて話しかける祥吾。だが女性はその質問に冷たい視線を返した

後、グラスへと手を伸ばした

「うつわ、冷た！なあ〜話すくらいイイじゃん。俺今振られたばっかで超寂しいの〜」

どこからどう見たら寂しい男に見えるのか…。尚も無視を続ける女性を前に本当に寂しくなってきた祥吾は奥の手を使うことに…

「そんな警戒しなくても大丈夫だって〜俺女に興味ないし」

それを聞いて女性の手が止まる

「…へえ…あんたゲイなの？」

「やっと口開いてくれた！と思つたら直球ですねえ」

女性は無表情のままグラスに視線を落とす

「まあそーだけどさ」

祥吾は口を尖らせて出されたグラスに手を伸ばした

「それで？…男に振られたの？」

「ん？…ああ〜そつ！道のど真ん中で！大声で叫ばれて大変だったよ。しかも俺が悪いみたいって言われてさあ〜」

「…あんたが悪いんでしょ？」

「うつ…おねーさん、一々言葉がストーレート過ぎるんですけど…」

「女に興味がないと言つても別れてすぐにこうやって女と話してるような奴のどこにいい人がいるの？」

「うつ〜ちよつとくらい慰めてくれてもいいんじゃない〜？」

「慰めてほしいの？」

「…はあ、負けました…あんた彼氏いないだろ…」

酒が進み、たわいもない世間話や愚痴だの、ほぼ祥吾の一方的な話で二時間程がたった…

祥吾が酔いつぶれている横で女性はグラスに残った最後の一口を飲み干すとマスターに金を支払う

「まいど…つと、この人も連れ出してくれないか？知り合いなんだ

る？もう店を閉める時間なんだよ」

マスターに頼まれ、男とは初対面だったが、常連でもあった女性は後腐れの無いように仕方なく了承する

「この人が飲んだ金額は？」

聞きながら祥吾のポケットから財布を抜き取る

祥吾の財布を広げるもその中身はほぼ零に近かった…

結局足りない分を払い、祥吾を引きずるように店を出る

祥吾を道端にほおり、自分の財布の中身を見てため息を吐くと、どうしたものかと祥吾に目を向ける

「んあ…あれ…俺いつの間に寝て…どこだここ？」

見覚えのない天井に驚き身体を起こす祥吾。辺りを見回すも、やはり知らない部屋だ。清潔感の漂う色で統一されている。ドアの向こうからテレビの音が聞こえてきた

恐る恐るドアを開けるも人影はない。テーブルに置かれたおいしそうなパンとコーヒーの臭いに釣られ手を伸ばした

「本当、しつめのなつてない人…」

驚いて伸ばした手を急いで引っ込める。声のした方に向き直るとそこには昨日の女性が

「ビックリしたあゝって、え？ここあんたの家？」

「…お金、返してもらおうから」
つかつかと寄って来たと思うと目の前に一枚の紙を向けられる

「は？」

領収書だ。そこには祥吾の財布では払いきれなかった分の金額が書かれていた

「酔いつぶれたあんたを道端に捨てていこうかとも思ったけど、額が額だから…私もそこまで寛大な人間じゃないの」

捨てていこうと考えた時点でちつとも寛大ではないが…

「マジか俺こんなに飲んでたあ〜？」

「仕事は？何をしてるの？」

「え〜と…自分探し中？」

「は？」

「目的が無いよりかいいだろ？」

にっこりと笑ってみせる祥吾

「つまり…無職ってこと？」

「そーとも言いますね…」

大きなため息を吐きながら頭を抱える女性

「長くなりそう…利子つけたいくらい」

ぼそりと独り言をつぶやく女性に向かって更なる追い討ちをかける祥吾

「あとさ〜俺家無しなんだよねえ〜」

「…」

「今まではその〜恋人の家に住んでたから〜」

女性の表情がずんと暗くなる

「バイトして金は返すからさあ〜あつあと、恋人出来たらすぐ移るし！…お願い！監視下に置いとくと思つて！ね？」

顔の前で両手を合わせ上目遣い&うるうるの瞳を向ける祥吾

「はあ、分かった…働いてお金を貯めるよりも金持ちの男を早く見つけてくれる方に期待する」

「ああ〜その方が早いかも〜さつすが！頭イ〜」

そんな態度に苛立ち睨みをきかせる女性

「わあ、ゴメンナサイ…」

祥吾が朝食を済ませた頃、女性はスーツに身を包み時間を気にしながら玄関へと向かう

「ここに置いとくから、スペアキー」

玄関の棚の上に何の飾りつ気もないカギが置かれる

「わざわざ作ったの？」

椅子に座ったまま、少し身体を後ろに倒しながら聞いてみる

「そんな訳無いでしょ、それじゃ私会社行くから…」

振り返る事無く靴を履く、出て行こうとノブに手を置いた瞬間、

祥吾が話しかけてきた

「あ、ねえ名前…俺、祥吾！黒田祥吾」

「…守川結衣…」

テキパキと仕事をこなす結衣。そこに一人の男性社員が結衣の肩をポンと叩き休憩に誘う。結衣と同期入社にして成績優秀かつイケメンだけどちょっと口下手な木村だ

コーヒーの入った紙コップを手以外の景色を眺めながら壁に寄りかかる

「神田マーカーテイニングのアポ取れたんだって？」

「まあ、なんとかね」

「守川さんは凄いな…女性なのにどんな仕事でもテキパキこなすし」

「…」

「俺も見習わなきゃな」

そう笑いながら結衣に目を向ける

「そんな事、前の会議での木村君のプレゼン、とても良かった」

「あれは、守川さんが一緒に考えてくれたから…」

「まあ、お互いライバルとしてこれからも頑張らないと」

結衣が微笑み木村のもとを立ち去ろうとした瞬間

「あの、今夜…夕食でも一緒にどうか？」

その時、祥吾の顔が浮かんだ

「…ごめんなさい」

「そっか、じゃあまた今度」

小さく頷くと結衣は部署へと戻っていった

結衣が仕事を終え、マンションへと戻ってきた。カギを刺すと空いていることに気づく

「あ、おかえり〜」

入ると奥から祥吾が明るく手を振る。返事をすることなく部屋へ入るとそれは見るも無残な状態に…。ちらかった部屋を見て愕然とする結衣

「ちよつと…何これ」

「へ？」

「今日一日何してたの？仕事は？見つかったの？」

「え〜と…明日！」

プツチンと何かが切れる音が聞こえたような

「あんたの大事なモノ切り落とされたくなかつたらさっさと片付けて！」

「はいっつっ！！」

祥吾は股下を隠しながら飛び起きるとそそくさと片付け始めた。

部屋が綺麗に片付くとほぼ同時に結衣が夕食を作り終えた

「わあ〜つつまそ〜」

何も言わずに先に食べ始めている結衣の前に腰を下ろす祥吾

「いったただつきま〜す」

結衣はいちいちテンションの高い祥吾に見向きもせず、器用にパスタを絡め取ると口に運び、テレビに目を向けている

「うまつ！やつぱ料理は女だよな〜」

その時ピクリと結衣の手が止まる

「今までの恋人なんて誰も料理できなかったもんな〜」

食べかけのまま立ち上がり皿を持ち上げようとする結衣

「え？なに、もお食べないの？」

「…」

「食べる！俺食べていい!？」

結衣は何も言わずに手を皿から離し寝室へと入っていった
「は？怒ってる？え？」

少し経って、寝室から出てみると祥吾はテレビの前で横になり眠っていた。食器も全て洗われている

「んあ…あれ、寝てた…？」

目を覚ますといつの間にか布がかけられている…カタカタと音がする方をみると、机の上にノートパソコンを広げている結衣の姿があった

「結衣…」

「…何？」

「え？…あつ、えつと…」

無意識に名前を呼んでしまった…

「…シャワー、先に入ってきたら？」

「…うん。仕事？」

「まあ…」

「そおだ！俺なんか手伝ってあげようか？」

「いい」

「…」

一度も目を合わせる事無くもくもくと何かを打ち込んでいる。話していても邪魔になるだけだと思った祥吾は風呂場へ向かう

「あ、結衣！」

「何？」

「布、かけてくれてありがとう」

結衣の手が止まる。祥吾は少年の様な笑顔でそう言い残すとすぐに浴室へと入って行った

日付が変わる頃、シャワーから上がった祥吾はつまらないテレビ番組に飽き飽きしながら虚ろな目で結衣を見る。今だPCを閉じる気配のない結衣、それほど仕事が溜まっているのか…

「うゝ俺先寝るねゝ？」

返事をする事無くキーボードをカタカタと鳴らしている

祥吾が目を擦りながら寝室へと向かう。パタンと扉が閉まった瞬間結衣の手が止まる

「ちよつと!？」

勢いよく寝室の扉を開く結衣

「ふえゝ?なに？」

「なに?じゃないでしょ!？何で当たり前のようにベッドに横になつてるの!？」

「だつて眠いもゝん」

「…っ!？」

「いいじゃゝん。俺、女に興味無いつて言ったでしょゝ何もしないつてゝ」

横になつたまま腕を上げ、ひらひらと振ってみせる。腹も立つがこの様子じゃ時間の無駄だと思い、少し力を込めてドアを閉めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9131t/>

Strange love

2011年6月8日00時55分発行